

思いを合わせ表現する音楽科学習

1 音と思いがとけ合う

本校音楽部では、これまで「感じて表現できる子」の育成を目指してきた。「感じて表現できる子」とは、音楽を全身で味わい、自分なりの表現を楽しむ子どもである。このような子どもを育むために、仲間とのかかわりの中で、音楽活動に取り組むことを重視している。具体的には、グループ活動やアンサンブル活動を取り入れた表現活動や創作活動の場を設定してきたことがあげられる。

一昨年度からは、「音と思いがとけ合う」ことをテーマに研究を進めている。ここで言う「音」とは、楽器の音や歌声だけに限らない。他にも、言葉や文字など、子どもが音楽活動において表出したもの全てを意味している。さらに、その「音」を聴いたり表現したりして起こる快・不快、好き・嫌いなどの「感情」がきっかけとなって、子どもの内面で引き起こされるものを広く「思い」と呼んでいる。そして、この「音」と「思い」がとけ合う状況を見出そうとしてきたのである。

昨年度は、「音」と「思い」がとけ合うために、「子ども同士のかかわり合い」と「教師のかかわり」を重視してきた。具体的には、前者では、互いの表現を鑑賞する場を設定し、その中で自己モニタリングが起きるということを想定した。子どもたちは、鑑賞の場で仲間の「音」や「思い」に触れ、そこでの気づきを交流し、新たな課題や表現へと向かう。また、後者では、教師が、子どもの表現を他者に紹介したり、グループ内のかかわりをよりよいものにしたり、自らがモデルとなったりしてきた。このような取り組みを通し、教師の「教えること」をとらえ直そうとしたのである。

以上のような研究を継続・発展させるため、本年度は「思い」に焦点化することとした。「思い」について、内実を明らかにするとともに、どのように「合わせる」かについて提案したい。そうすることが、新たな「教えること」を見出すことにつながると考えるのである。

2 合わせる「思い」

本テーマ「思いを合わせ表現する音楽科学習」における「思い」には、次の三つがあると考えられる。

(1) 「音楽的イメージのはじまり」としての思い

「音楽的イメージのはじまり」とは、音楽から誘発された「快・不快」といった感情や、「明るい・暗い」「にぎやかな・静かな」といった感受、「嵐・お祭りみたい」といったような、具体的な場面や状況の想像のことである。したがって、この「思い」は本校でいう「音楽的イメージ（音楽の特徴や美しさから喚起

され、過去の学習・生活経験を織りませながら次第に形成していく心的実体)」のはじまりと言える。

楽曲を聴いた印象について「思い」を合わせていくことは、他者の音楽的イメージに触れることになり、自らの音楽的イメージを豊かにすることにつながっていくと言える。また、音楽的イメージを豊かにすることは、表現を高めることへとつながっていくため、この「思い」を合わせることを大切にしているのである。

(2) 「音楽文化や表現へのあこがれ」としての思い

「音楽文化や表現へのあこがれ」とは、「音楽的イメージのはじまり」における思いを受けての「こんなふうに歌いたいな」「あんなふうに演奏したいな」といった、自分の中に生まれた思いや願いである。また、鑑賞したDVDなどを参考にしての、「あの動きをやってみたいな」といった身体表現にかかわる思いや願いも含む。この思いを合わせることにより、「あこがれ」が強くなったり、「仲間と一緒に表現していきたい」という思いが強くなったりする。このことは、活動に向かう意欲を高めることにもつながると考える。

(3) 更新され続ける思い

他者を意識することで更新される思い

「他者を意識することで更新される思い」とは、上述の二つの思いを受けた上で、鑑賞者を意識しながら、「どのように表現していくのか」について考えるときに生まれる思いである。また、表現上の工夫について、どの方法を用いていくのかを決めていくときに起こる方向性とも言える。具体的には、表1に示す通りである。

合わせた思いは、実際に表現してみることで、より、どんどん更新されていく。また、「サンバの雰囲気を出すために、マラカスを使おう」というように、意図を伝えながら思いを交流すると、より思いが合わせやすくなる。

モニタリングで更新される思い

「モニタリングで更新される思い」とは、自他の表現を鑑賞する場を通して、「思い」の再現に対するモニタリングから生まれる思いのことである。具体的には、表2のようになる。

この思いは、表現を通して、自己、グループの両方で評価が繰り返し行われることにより更新されていくのである。そして、この思いを合わせることは、自分たちの表現への満足度を確認することにもなり、それをもとに表現を修正していくことができるようになると思う。

以上、述べてきた「思い」は、他者との対話や演奏を繰り返すことによって、合っていくものである。

表1 「他者を意識することで更新される思い」の例

工夫の観点例	「思い」の具体例
楽器編成	・マラカスを使おう ・リコーダーの担当は、二人にしよう
奏法	・この部分はスタッカートで演奏しよう ・タンバリンは打ったり振ったりしよう
リズム	・もっと他のリズムを考えよう ・このリズムは曲にあってるかな
音の強弱	・曲の盛り上がりに向けて音量を上げよう ・この部分はもっと弱く(pに)しよう
速さ	・速いテンポで演奏しよう ・テンポはゆっくりにしよう
身体の動き	・もっと動きを大きくしよう ・足でリズムをとるようにしよう

表2 「モニタリングで更新される思い」の例

<ul style="list-style-type: none"> ・重たい感じがして、サンバっぽくなかったな ・さっきより、明るくなってきた ・さっきよりリズムにのりやすくなった ・いい感じになってきた ・今の演奏は、うまくいった、楽しかった
--

そして、「思い」を共有することは、仲間との一体感や表現のまとまりを生み、「音」と「思い」のとけ合った表現を可能とするのである。

3 「思い」を合わせる

表現する喜びや、成就感を味わうためには、まず互いの「思い」を伝え合い、集団として、みんなが納得のいく「思い」にまとめていかななくてはならない。このことにより、子どもたちは、自分と同じ、あるいは異なる「思い」に触れ、自分の「思い」を明確にしていく。また、「思い」を表現の中核に置くことで、さまざまな表現が可能になると考える。そして、仲間と試行錯誤しながら「思い」と「表現」とを相互往復することにより、自分たちの音楽をつくっていくことができるのである。

以上のことから、活動の中で生まれるさまざまな「思い」を大切に、「合わせる」ことを重視していくのである。そして、ここに新たな「教えること」が見えてくるのである。

(1) 意欲的・主体的に合わせる

意欲的・主体的に「思い」を合わせていくために、これまでもグループ活動やアンサンブル活動など、小編成による活動を重視してきた。これは、一斉で活動するときよりも、少人数で活動したときの方が、子どもたちが、より意欲的・主体的に活動する姿が見られるからである。

このような姿が見られる背景として、活動がグループに任されるということが考えられる。少人数での活動となると、いくつものグループに分かれるため、常に教師を頼れるわけでない。そのため、自分たちで練習を進めていくことから、教え合いや、相談、認め合いといった子ども同士のかかわりが活発になる。そして、その活動の中においては、たくさんの「思い」を合わせていると考える。

この子ども同士のかかわりをより活性化するためには、教師のかかわりが大切になってくる。ここでは、次の四つを例にあげ、思いを合わせるための教師のかかわりについて述べていくこととする。

グループ活動の場の設定

上述のように、グループ活動やアンサンブル活動は、仲間とかかわりながら意欲的・主体的に「思い」を合わせるのに有効である。しかし、「仲間とともに活動していきたい」と思えるような題材でなくては、活動は活性化されない。

そこで、教師のかかわりとしては、意欲的にグループでの活動に取り組むことができる場を設定することが必要であると考え。具体的には、子どもたちの興味や発達段階に応じた創作活動を取り入れたり、新しい音楽文化と出会う場を設定したりすることである。仲間とかかわりや、さまざまな音楽とかかわりによって、子どもたちはイメージをより豊かにふくらませることができ、活動への意欲も高まってくると考えるからである。

他のグループとの違いを明示する

ここでの「他のグループとの違い」とは、そのグループにしかない表現や表現の方法、練習の仕方など

を示す。具体的には、「互いが見えるように立つ位置を工夫している」「自分たちで作った楽器をつかっている」「どのグループよりも各パートの音量バランスがよい」などがあげられる。

教師のかかわりとしては、各グループでの活動にかかわる中で、その「違い」を見つけ、何がどのようによいか具体的に認め、子どもたちの「違い」に意味づけや価値づけを行っていくことである。

グループ活動が活性化されるように支援する

教師のかかわりとしては、グループ内で表現を鑑賞し合う場を設定することがあげられる。実際には、グループ内で鑑賞する立場の人をつくるよう促す。そして、自分たちの表現を鑑賞させ、目指している表現となっているかどうか振り返らせる。このことによって、課題が明確になったり、他の表現方法を考え出したりするため、「思い」を合わせる場面が多く生まれるのである。

うまくいったことがみんなに認められるようにする

教師のかかわりとしては、主に次の二つがあげられる。一つ目は、できるようになったことを、表現を通して全体の場で紹介することである。例えば、今までリズムの合っていない演奏だったグループが、指揮者を設けることという工夫をすることによって、息の合った演奏となったことなどを紹介するのである。

二つ目は、振り返りカードを活用することである。具体的には、鑑賞活動などを通して気づいた他のグループのよさを、授業終わりの振り返りの場で伝え合わせたり、振り返りカードに書かれた他のグループへの記述を、次の時間の最初に紹介したりするものである。

以上、のかかわりをきっかけとして、からまでのかかわりを大切にすることにより、子どもたちは、自分たちの表現やその方法などに対して自信をもつようになり、グループとしてのまとまりも強くなる。このことによって、グループ活動がより活性化し、意欲的・主体的に「思い」を合わせていこうとするようになるのである。

(2) より調和的に合わせる

「より調和的に思いを合わせる」ためには、他者を理解しながら、「合わせよう」とする意識が必要である。このことは、音楽的調和を求めていく上で、必要不可欠なものとする。そこで、昨年度提案した音楽的調和に向かうための要素から、次の二つに焦点をあてることにした。

互いの役割を知る

「互いの役割を知る」とは、自分のパートは主旋律、隣のパートは副旋律、といったことを明確に知ることである。ここでいう「明確に知る」とは、パートごとの「音」を知るだけでなく、「思い」についても知ることである。なぜなら、それぞれのパートが奏でる音の向こうには、それぞれの「思い」があるからである。それを合わせることで、互いの思いは、より調和的になるのである。

6年生の器楽合奏では、低音楽器を担当する子どもから、「自分はベースなので、主旋律の音を聴きながら合わせたり、音量に気をつけたりすることができた」という振り返りが見られた。このことは、「主旋律だからしっかり響かせよう」といった仲間の思いを知って、それに合わせたと言える。

教師の働きかけとしては、合唱や合奏などにおいて、各パートの表現を鑑賞し合う場を設定する。そのことにより、他のパートの役割や、自分のパートとのつながりに気づくことができる。さらに、その場において、「どのような思いで表現しているのか」を問い直す。そうすることによって、互いの思いを知ることができるからである。また、このことから表現に変化が見られたとき、その表現を認める言葉がけをすることで、より調和的に思いを合わせることができると考える。

自分の役割を果たす

「自分の役割を果たす」とは、自他の役割を知った上で、それを生かした表現をすることである。4年生の器楽合奏では、「ボンゴ」を担当することになった子どもが、新しい楽器との出会いによって、「たくさん叩きたい」「おもいきり叩きたい」という思いをもった。そして、その思いのまま演奏を行ったため、同じグループの仲間から、「自分の音が聴こえない」「途中から演奏がバラバラになった」という意見が出された。このような場合、子どもによって、素直に仲間の思いを受け止められる場合と、そうではない場合とが見られる。

教師の働きかけとしては、まず、自分の役割を問い直す。そして、主旋律とその他、曲の盛り上がりとその他の部分との音量を区別するなど、自分の思いと、仲間の思いを合わせて表現している子どもやグループを紹介する。また、そのように互いの役割を意識して表現することで、全体の表現にどのようなよさや影響があったかなど具体的に伝え、意味づけ・価値づけを行う。このことによって、自分の役割を果たすことの重要性に気づき、自ら表現を変えていく姿が見られるようになる。また、これらは、全体提案にある心の知性の自己責任にもつながってくる。

以上のような、「思い」を大切に、「合わせる」ことを重視する実践を通して、子どもたちが音楽文化に参加し、仲間とかかわり合いながら自ら学ぶという状況が大切であると考えに至った。そして、そのような状況をつくりだすことこそが、新たな「教えること」なのである。

4 とらえ直した「学ぶこと」

子どもたちが「思い」を合わせ、表現していく実践を通し、とらえ直した「学ぶこと」として、次の二点があげられる。一つ目は、自分の思いを明確にもち、「思い」と「表現」を仲間とともに相互交流させることによって、「思い」は更新されていくという、「思い」の更新の仕方である。また、この「思い」の更新が表現の高まりへとつながっていくということも学ぶことの一つであると考え。二つ目は、「思い」と「思い」、「音」と「思い」とを合わせるためには、自分の感情をコントロールする力が必要であるということである。この力は、集団による学習をより活性化し、有効なものとするために必要不可欠であると考え。

(白石和美・井筒かおり)